坑内帽の思い出

退職者　藤田勝彦

私は終戦後の二十三年十月入社。操車夫として旗ふりをしていましたが、二十五年の一月四山鉱に、ろ方掘進工として転勤したのが、坑内帽子とのそもそものなれそめです。

当時の帽子は布製で軽くはありましたが、慣れぬうちは物に不注意にも、通行していると天井に頭をぶっつけることはしばしば、本当に痛い思いをしたものです。

転勤間もなくして、鉄の帽子となりました。いまでは笑い話しになりますが、開発ギカイの野口さんという人は、バレーボールの球を半分にして被っていましたし、ボール（アルミの食器）を帽子にしている人もありました。中川という人などは、布の帽子の上にねじり鉢巻をして、手にツバキをつけて元気に硬積していたのを思い出します。

坑内からその姿消えても
三本線の誇り消えず

何といっても貴重な体験となったのは、三十五年の「みいけと安保」の闘争です。ここでも帽子は大切な役目を果しました。

三十五年三月二十八日、鉄帽子が折りかさなるように円くかがり火を囲んで暖をとっている四山鉱南門で、携帯ラジオはじきりに、三川鉱乱闘事件の様子を放送していました。

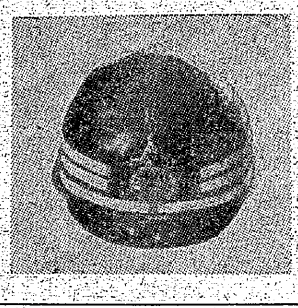
闘争も段々と日数が経ち、桜の花の咲くころ、山の神や四山鉱の桜はいつもと変ることなく花吹雪

鉄帽子の黒い肌だけを残して、チョコンと一人淋しく人車に座っている脱落者を見る時、私の気持は何とも複雑でした。

正しい者がかぶることのできる三本線の帽子は、三十七年の水俣闘争で再度炎天に焼かれ、政転闘争では通産省や労働省の玄関口で、寒く、そして冷たい師走の風に吹かれるなど、いろいろな、楽しい、苦しい思い出を残しながら停年を迎えた私とともに坑内から姿を消します。しかし、労働者としての魂は決して消えることはありません。いまここに退職の日をむかえ、これらさまざまのことが私の脳裏をかすめるのです。

×　×

四山指導部六分会新聞から紹介しました。



だれからも〝三本線〟の名で呼ばれる、三池労組員の坑内帽

経つにつれ、職制による切り崩し説得がひどくなく、脱落する者多く、私たちは方別ストやいろいろな方法でこれに対抗した。ややもすれば、私までがひきずりこまれようとする不安がありました。職制が縁故をたよって二、三人連れで説得に来たが、私は正しい信念のもとにガンとして動じなかった。

職場では一晩過ぎると、説得に負けて白い三本線を剝ぎとられ、

拝哲、連日の活動ご苦労さまです。

私も、機関紙〝みいけ〟を職場の仲間に進められてから約一年。三池といえば「安保と三池」という言葉と、高橋竜生氏の「石蹄の花が咲きました」を知るくらいの知識でした。

いま、毎月送られてくる〝みいけ〟が、あの保安無視の炭じん爆発、多くの死者、さらにCO患者を守るたたかいへと、まさに人間としての宿命の闘争があるとが、ともすれば楽な方に逃げる私に「待った」をかけてくれます。

いまから十年前、三池のたたかう仲間が、あくどい資本への怒り

が舞い、ピケの坑内帽子がカブトのようで本当に若武者を見る姿でした。

総評九州拠点十万人大集会の七月十七日、鉄帽子の波を見て、働く者の連帯と労働者の力を確認。ただただ感激感激でした。

長い長い闘争も終結。十二月一日、鉄帽子に「団結、抵抗、統一」の三本線も生々しく、高い誇りと固い団結を誓い合って就労しました。それにもかかわらず目が

短歌

四山　堀前はるを

誓ひ

組合旗掲げて集ふ坑夫等の七〇年の団結を誓ふ
坑夫等の差別に荒れし指先に屠蘇酌み交す盃を持つ
団結を誓ふ心で酌み交す酒なみなみと初日とらへて
団結は働く者のすべてなり七〇年の波荒らくとも
坑夫等の集ひて唄ふ団結の歌声高く初空へ拡がる
息白く坑夫集ひて抗議する七〇年の差別始まる
夜なべの灯照らして妻の土方着を繕ふ針に力ともれり
土方着を繕ひながら妻夜毎夫（つま）と差別を分ち合ふべく

親心

帰省せし娘に「元気だったね」と涙せし妻哀れとも思いつ
よろこびの屠蘇酌み交す妻と娘の荒くれし指とやわらかな指
帰省せし娘の好きなお料理を作れる妻の指先はずむ

三池に学ぶため
詩文集を読みたい

三重県　鈴木宝王さん

三池といえば「安保と三池」という言葉と、高橋竜生氏の「石蹄の花が咲きました」を知るくらいの知識でした。

いま、毎月送られてくる〝みいけ〟が、あの保安無視の炭じん爆発、多くの死者、さらにCO患者を守るたたかいへと、まさに人間としての宿命の闘争があるとが、ともすれば楽な方に逃げる私に「待った」をかけてくれます。

いまから十年前、三池のたたかう仲間が、あくどい資本への怒りを、もって安保をたたかっていたとき、私は中学二年のころ。新聞配達する中で「アンポ」の言葉を知りました。意味はわからずに。

高校へ、そして社会へ。昭和四十年三月、いまの砂糖会社にはいりました。しかしその職場もそんなに甘くはなく、昭和四十二年十一月会社は不況を理由に、組合員三百余名中六十一名の首切り合理化をおしつけてきました。

当時十九才で組合のこともわからない私でしたが、共に働いている仲間の首を切る資本への怒りはありあまる程でした。その闘争の連日のピケの中で読んだのが「石蹄の花が咲きました」。

全国いたるところの職場のように砂糖産業も体制的合理化の攻撃を受け、九州や青森で企業閉鎖、首切りなど起きています。

社会党の敗北、たたかう労働者の組織ぶっつぶしの攻撃、さらに憲法改悪、民主主義の破壊、独占資本を守るための安保体制の強化と、われわれへの弾圧は、七〇年にさらに厳しくなるでしょう。私も一労働者として、階級的・戦闘的にたたかう三池の仲間に学びたいと思います。それでどうぞ、詩文集「やがてくる日に」を一部お送り下さることをお願いします。

もうじき春闘です。そして「安保」のたたかいへ。働く者の、本当の社会がつくられるその日まで共に頑張りましょう。

×

鈴木さんには詩文集をすぐお送りしたが、そのご住所は「三重県三重郡菰野町田口二〇六一一二」

「炭鉱の火消えず」
荒尾で公演

音楽舞踊団カチューシャ

まだ冬の寒さはつづいているが、ちょうど春のおとずれを告げるかのようにして、音楽舞踊団の〝カチューシャ〟が、荒尾にやってくる。

きたる十八日（水曜）の昼（午後三時から）と夜（午後六時三十分から）の二回、公会堂での公演がきまった。

第一部の「日本とアジアの民族舞踊集」、「コルホーズのよろこび」、第二部の「メコンは流れる」などは、その合唱とはち切れそうな踊りとともに、懐しく思い出される種目であるが、こんどは新しく加えられて公演される、ミュージカルの「炭鉱の灯は消えず」に、とくに心をひかれる。

「石油資本の圧迫によって、労働者の犠牲によって行われた炭鉱合理化ととり組み、炭鉱労働者の根強く生きる姿を描いた」というが、果たして私たちの期待にどれだけこたえてくれるものかカチューシャだけに信頼できる。

主催は〝荒尾カチューシャを見る会〟。入場料の三百円は、正直なところちょっと痛いが、しかし必ずや得るところは大きいに違いない。

入場券は、組合本部や各指導部で取り扱うこととなろう。

組織と啓蒙私見

三川　木村守

七〇年・七〇年と声を大にして取り組んだにもかかわらず、去る十二月の歳末総選挙に、国民大多数の命をあずかるはずの政党、社会党の公認候補がいたるところで敗北をきっした。なぜか？党をはじめ、組織をあげて応援した労働組合も、その反省は十分なされているであろう。しかし今次の敗北がはじめてでなく、六〇年の三池大闘争以後のじり貧より、大きく後退したことを考えるとき、労働者の一人ひとりが改めて深く反省をめぐらさなければ、この轍は容易に拭い去られるものではない。

去る一月十九日、三池労組では三池港務所の合理化に反対して時限スト、ならびに三番方の方別ストが行なわれた。その日三川指導部では、五・六職場分会と港務指導部の分会との交流が持たれ、討議がなされたことは歓迎大いなるものがある。その中で港務指導部より「会社が発表する港湾開放は拡大する港の設備、維持費を国および県より得るためで、内実は他産業の入り込みを拒否し、全利益を独占するためのものでしかない」と力説される。

これはほんの一例。僕はこの辺に保守・資本がのさばり、労働者および国民大衆が苦しみの中に押し込められていく原因があるのではないか、と思うのである。

「合理化」、この言葉は世界各国の企業がコストを下げるための合言葉にして知恵を働かし（事実このためからの、文明機器視された品物を調法にいくつか使用している労働組合事務所）ているのに対し、労働組合では、人減し、労働強化への反撃のみに終始しているようである。

労働者が労働強化に反対するのは至極当然である。問題は、そこを最低戦術とした高度な戦術が生まれてこないかと思うのである。

去る年末選挙の最中、ある場所での会話をのぞいてみよう。「社会党のいうのは七〇年安保、戦争反対。もう聞きあきて、ちっとも耳にはいらん」の一点に片付けられているようであった。

保守側の宣伝文句―「港湾開放、新産都市建設」問題などは、大衆をチョロマカスには判じやすい寸言であり、対する革新側の「労働密度の強化、戦争の道へ駆り立て」などは、理屈ではわかっても、差し迫って自分のものにならない限り、大衆感情はわいてこないようである。「大衆の心をわかすコツ」―それがこれからの労働運動に要求されるのではないだろうか。

二万の警官、重装備装甲車をもってしても破り得なかった三池大闘争は、教えるもの大いにあり、大衆と離反しない労働組合、そのためには交流こそ絶対必要である。労働組合組織は首切りにより破壊することができ、驕りに驕る資本、それを助ける保守自民党政府。

われわれは命を守るという共通のたたかいを、大衆と共にもっている。身に迫ってからでは遅い。

消さずにほしかった「がんばろう」

▼…一九七〇年の炭労手帳を買った。私はうたうことが好きだから、すぐ歌詞の載っているページを開いて見た。

ところが「がんばろう」の歌が今年は消えている。だれでも、完全に覚えてしまったんだろうか。

「炭掘る仲間」が消えてなくなったことはともかくとして、「がんばろう」は消さずにほしかった。

六九年の手帳を破り、七〇年の手帳にはりつけた。